

西部広域行政管理組合消防局

24時間
365日

～地域で活躍する消防隊について～

Q1

救急室長のお仕事について教えてください



西部消防局における救急活動の統括、管理を主として仕事をしています。

また、救急搬送に係る、各関係機関との調整も大きな仕事の一つです。救急搬送する医療機関はもとより、昨今は新型コロナウイルス感染症の拡大により、保健所との連携は特に密になっています。

その他に、救急に関する統計データ等により問題点を抽出し、さまざまな諸課題について実情に応じた検討を行い救急業務実施体制の充実、強化を推進しています。



田代救急室長（司令長）

Q2

コロナ禍の救急活動で苦勞することは？



新型コロナウイルス感染症が国内で確認されてから2年以上経過しますが、いまだに終息する見通しが経たない現状が続いています。長引くコロナ禍でも救急隊は助けを求める方へ適切な応急処置を施し、いち早く適切な医療機関へ搬送する活動が求められます。救急現場は新型コロナウイルス感染者を搬送する可能性があり、全ての救急活動で感染防止対策を強化しています。救急隊員自らが感染することを防ぐとともに、他者への感染源にならないことを心掛けて活動をしています。しかし、感染対策を強化することにより夏の高温環境下では過酷な活動となります。救急隊員が熱中症にならないようにガウンの下に冷却ベストを着用するなど熱中症対策には苦慮しています。

Q3

地域住民の方へのメッセージをお願いします

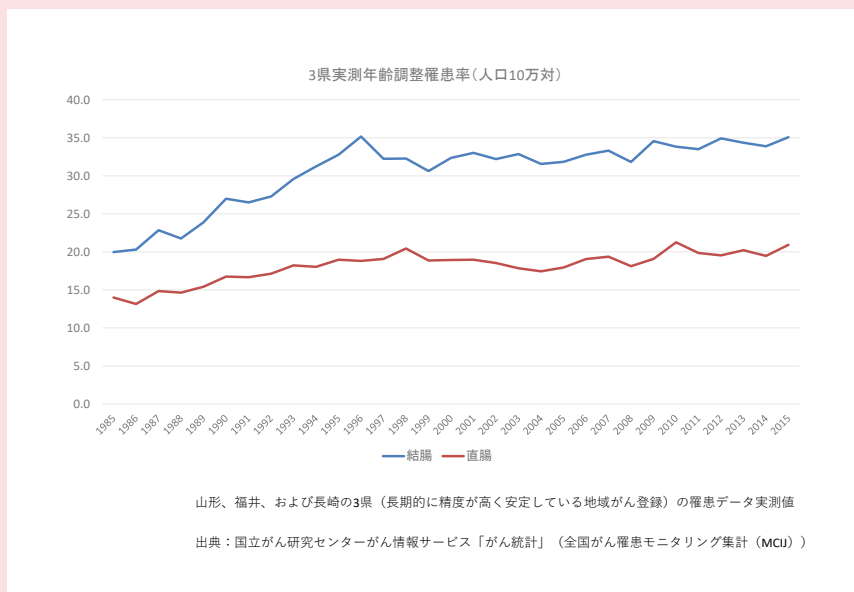
119番通報からできるだけ早く傷病者の方を病院へ搬送するため、現場に到着するまでの間に、現場の情報や傷病者の容態などを直接電話で聞きくことができますので落ち着いて返答して下さい。また、救急車が到着するまでに保険証、病院の診察券、お薬手帳等を準備していただくとスムーズな病院への搬送に繋がりますのでご協力をお願いします。

●主な業務	火災・救急・救助活動	
●西部消防局職員数	310名	
●救急出動件数	2022年4月	938件
	2022年5月	914件
●救急出動種別	①急病	
	②一般負傷（転倒・転落などのケガ）	
	③交通事故	
	④転院搬送（病院間の搬送）など	



大腸がんは増加傾向

近年大腸癌が増加する傾向にあります。国立がん研究センターのデータでは下図のように結腸癌、直腸癌ともに罹患率は増加しています。また、人口の高齢化に伴い高齢者の大腸癌が増えてきています。当院で最近3年間に大腸癌で手術を行った症例をみると男女比は3：2、年代別の患者の割合は70代が33%、80代が28%、90代が7%であり、70代以上の高齢者が占める割合が69%と高率でした。



高齢者大腸がんの特徴

高齢者は、フレイルと呼ばれる精神的、身体的に脆弱な状況になっていることが多いことに加えて、社会的な側面にも注意が必要です。

高齢者における併存症もしくは基礎疾患は様々なものがありますが、脳梗塞や心房細動などの既往のために抗血小板薬、抗凝固薬を内服している人も多くおられます。大腸癌治療といえば手術が基本ですが、周術期の出血のリスクと血栓塞栓症の発症リスクを勘案してそれらの内服薬の休薬の可否を判断しなければなりません。また、認知機能の低下が見られることも多く、手術前では一人で意思決定ができなかったり相談できる身寄りがなかったりする場合もしばしばみられ、手術後の生活をどのように送るか社会的な側面の課題もでてくるが多々あります。大腸癌が見つかった場合、治療をどうするか。元気な高齢者であれば手術や化学療法など通常の治療が可能とされていますが、年齢によっては大腸癌以外の疾病で寿命を迎える場合があることも考慮すると、患者さんにも十分な理解をしてもらった上で治療法を選択してもらうことが望ましい状態と言えます。

しかし、現実には時間をかけて説明しても病状や治療方法を理解して、自ら治療法を選択できない人がおられます。大腸癌の特性でもありますが、進行して腸閉塞になってから見つかる場合があり、緊急手術が必要になるなど時間的な余裕がないまま迅速な意思決定が要求される場合があることも問題点のひとつです。意思疎通の難しい高齢者では特に平素から

ACP(advanced care planning) を積極的に考えていくことの重要性が感じられます。

高齢者には ADL が制限されている人も多く、介護保険の意見書における日常生活の自立度という観点では、ランクが上がって C になると術後合併症の発症率が高く在院日数も長くなります。入院日数が長くなるとそれによってさらに身体的・精神的な活動性が低下する恐れが出てきます。なるべく侵襲の少ない治療を行い、入院日数をなるべく短縮することが、高齢者の大腸癌治療に望まれることだと思えます。

そのためにはやはり早期発見が重要と考えられ、検診に期待することになります。

大腸癌検診の実態

「鳥取県がん検診実勢報告書」（令和 3 年 3 月）によると令和元年度の大腸がん一次検診受診率は 30.4%にとどまっています。高齢者における大腸がん一次検診受診率は 65 ～ 69 歳、70 ～ 74 歳、75 ～ 79 歳、80 歳以上、の年齢階級でそれぞれ 36.5%、45.9%、32.7%、14.2%となっています。因みに国立がん研究センターによりますと 2019 年の 40 ～ 69 歳男女の大腸癌検診の受診率の全国平均は 44.2%となっています。

高齢者大腸がんの治療戦略

大腸癌はごく早期に見つかれば大腸内視鏡で処置できるものの、進行してくると手術が必要になります。根治させるには手術が第一選択ですが、部位や進行度によって手術の難易度、術後経過は異なります。結腸がんでは手術も腹腔鏡で完遂できれば回復も比較的早いと思われませんが、ごく小範囲の切除にとどめる場合やなるべく短時間で手術を終えるためには開腹手術の方が優れている場合もあります。進行がんの化学療法についても、大腸癌治療ガイドラインでは「PS(performance status) が良好で主要臓器機能が保たれており化学療法に対してリスクとなるような基礎疾患や併存症がなければ 70 歳以上の高齢者にも、術後補助化学療法を行うことと推奨する」とされています。単純に年齢で区切ることなくそれぞれの個人の状態をみて、その人にとっての最良の QOL につながるように必要な治療を積極的に行うべきだと思えます。

様々な問題が関わってくる可能性がある高齢者の大腸癌治療ですが、早期の発見がよりよい QOL につながっていくと考えられるため、高齢化社会においては検診の意義が一層重要になってくると思われます。高齢者の大腸癌に対しては早期発見から治療、その後のリハビリ、社会的な支援まで、当院の理念である「信頼・優しさ・安全」を念頭に全職種で関わっていきたいと思えます。

山陰労災病院設立経緯

医師会の皆さまには、労災病院で勤務された方もいらっしゃると思います。本院は昭和 38 年に設立されたので、そろそろ 60 年になります。病院が還暦を迎えるこの機会に設立の経緯をまとめましたので、そのダイジェスト版を紹介いたします。

1. 労働者災害補償保険法の制定と労災病院の設立

戦前の労働者保護法は対象の職種や補償などが限定された、極めて不十分なものでした。戦後、昭和 22 年に労働条件の最低基準を示した労働基準法が公布され、同時に労働者災害補償保険法によって、業務による負傷や疾病などに対して補償するとともに、労働者の社会復帰を促す療養施設等の設置及び運営を行う労働者福祉事業について定められました。

この法律が労災病院の始まりで、昭和 24 年に九州労災病院が、その後、東京労災と栃木珪肺診療所が開設されました。昭和 26 年には関西地区の尼崎市に開設が決定され、これが契機となり、全国の工業地帯や炭鉱、鉱山などの労働者の多い地域で労災病院開設の気運が高まりました。その結果、昭和 27 ～ 29 年の 3 年間に 16 という多くの病院の設置が決定されました。

2. 労災病院の米子への誘致

昭和 29 年頃、米子市に労災病院設立の声が鳥取大学医学部において上がりました。声の主は、整形外科西尾篤人教授で、中四国の 5 県（岡山、広島、山口、香川、愛媛）の設立ラッシュが引き金になったものと思われます。西尾教授は「…教室が発展するためには密接に協力できる病院が必要と考えて、鳥取と島根の肢体不自由児施設、山陰労災病院の設立に努力しました…」の文章を鳥取大学整形外科開講 30 周年記念誌に残しておられます。これを裏付けるように、山陰労災病院二十周年記念誌に「設立誘致に際しましては、鳥取大学西尾教授や鳥取大学太田亘先生、また元・自治大臣・故赤沢正道先生のひとかたならぬご尽力がありました」の新宮彦助第 3 代山陰労災院長の言葉があります。

ところが、わずか 3 年間に 16 病院の設立を決定した結果、1 病院当たりの予算は低額となり、追加予算を必要としたため完成までに長年月を要することとなりました。そのため 30 年度以降は 1 病院当たりの予算を増やし、短期間での完成開院の方針に変更されました。このため新設病院数は限られ、米子市設立は頓挫していましたが、昭和 34 年鳥取県は米子市と共に労働省及び労働福祉事業団に対して、労災病院の設置を正式に要望しました。それを受けて、昭和 35 年の労働福祉事業団による現地調査の結果、皆生温泉が適地と決定しました。昭和 35 年 7 月に至り野坂米子市長、石破鳥取県知事、清水労働福祉事業団理事長、鳩川鳥取労働基準局長の四者の間において覚書が交わされ、地元米子市は建設用地として一万坪を提供するとともに、温泉の供給、水道の配管、電力並びに電話設置などに全面的に協力することとなりました。

3. 山陰労災病院建築、開院準備

昭和 37 年 1 月 19 日に地鎮祭、起工式が行われました。設計は建設省中国地方建設局営繕部により、工事は藤田組広島支店によって行われ、建設予算は 349,203,000 円、医療機械器具、什器等が 64,726,000 円と当時まとめられた開院式関係係に記載されています。

昭和 38 年 1 月、石西進先生が院長に発令され、2 月 1 日には労災病院開設準備事務所が設置されて、事務局長に古浜理氏が発令され、開院準備が始まりました。その一幕が初代薬剤部長吉積省三氏により「…山陰地方は鉱工業に恵まれないため労災という言葉になじみがなく、老災、労済などと笑えない文字で書かれたり、老人専門病院と間違えられたりしたものでした。最初は、鳥大近くの川魚料理店の“おほ江”の 2 階で、畳の上に長い座り机が並んだものでした。メンバーは、石西院長以下 6 名で、新宮現院長は鳥大より出勤されていた。… 3 月 1 日より皆生の事務局長宅に移転し、やっと腰掛けて事務がとれるようになった。そして病院名も鳥取労災より山陰労災に変更となり、…」と語られています。

病院名の変更については、昭和 38 年 3 月の労働事業団社内報には「鳥取県米子市に目下新築中の鳥取労災病院は、4 月 1 日から『山陰労災病院』と改称される」とあり、この内情について、古浜理氏は「始め鳥取労災病院として発足予定でしたが、山陰地方の労災病院は当院だけということになり、そんなら山陰労災病院にした方がよいと考え、本部の了承を得て変えました」と語っています。病院は昭和 38 年 4 月に完成しました。



開院当時の北からの航空写真
田畑の中に松林に囲まれた病院、職員・看護師宿舎が見られます

4. 山陰労災病院開院

しかし、実際の開院は、資材や設備機器の搬入が間に合わず6月に遅れました。その理由について、初代看護部長真野チエコ氏は山陰労災病院開院20周年記念誌に「… 積雪のため資材搬入が不可能となり、4月開院がやむなく6月に延期されることになった」と記載しています。この年は、1～2月に断続的な降雪と長期間の異常低温が続き、米子で最高積雪深72cmをもたらした38豪雪と呼ばれる大雪害があった年でした。

設置の条件の1つであり、売り物でもあった温泉について、古浜理氏は「米子市がボーリングをしましたが、遂に湧出せず断念せねばなりませんでしたが、… 早速私の縁故の老人に相談しましたところ、幸いこの方が温泉会社の地元で唯一人の重役で、なんとかしようということで、開院4日前に温泉を導入することができました」と語っています。

昭和38年6月1日に開院式が新病院の外来待合で催されました。労働省、建設省、厚生省など本省や鳥取県、島根県、米子市、大学、医師会、工事関係者など多岐にわたる215名の招待者の出席を得て盛大に挙行されたようで、その様子が開院式アルバムに残されています。

診療は、6月5日 内科、外科、整形外科、皮膚泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、理学診療科の7診療科、病床数200床をもって開始されました。



開院当時の西側からの外観
建設省の昭和38年度全国建設設計コンクールにおいて、第1位最優秀作品に選ばれました



開院当時の運動浴施設
皆生の温泉水を使用していました

病気になっても働きたい方の相談窓口

治療就労両立支援相談窓口のご案内

がん、糖尿病、脳卒中等の治療を受けているけれど、治療を受けながら仕事ができるだろうか？

会社の上司や同僚に病気のことをどのように話をしたらよいのだろうか？

当院では、がん等の疾病を抱える労働者のための「治療と就労の両立」についての相談を専門に承る「両立支援コーディネーター」が常駐しておりますので、安心して復職するためのご相談ができます。

対象者：病気で治療中の方やそのご家族、事業場のご担当者の方

場 所：山陰労災病院 総合支援窓口（1階）

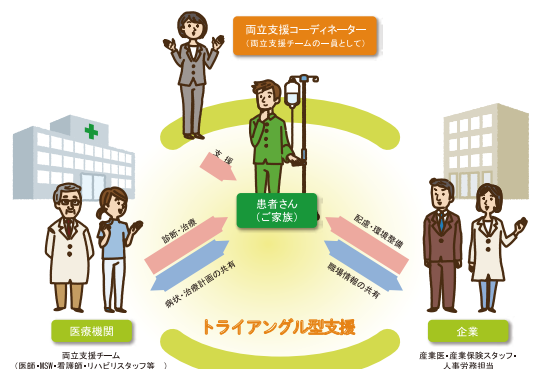
時 間：13:00～17:00（月曜～金曜）※土日祝日、年末年始除く

対象者：医療ソーシャルワーカー（両立支援コーディネーター）

※両立支援コーディネーターの養成研修を受講した職員が

対応するため、円滑にサポートすることができます。

連絡先：0859-33-8181（代表）



加藤クリニック

院長 加藤 卓

診療科目：内科 胃腸科 呼吸器科 放射線科

住 所：〒683-0003 米子市皆生 3 丁目 6-32

T E L：0859-35-7000



Q 貴院のご紹介をお願いします

A 米子市皆生 3 丁目に開業しています加藤クリニックです。今年の 5 月に 20 周年を迎えました。標榜科は内科・呼吸器内科・消化器内科・放射線科です。一般診療、訪問診療、健診（一般、市町村）予防接種（インフルエンザ、肺炎球菌、他各種）などを行っています。診療日・診療時間は月曜日から土曜日、午前 9 時から昼休憩をはさんで午後 7 時までです。米子市の環状線としての皆生車尾線（南北）沿いにあり、また西側（皆生通方面）への幹線道路も通っています。比較的交通量が多く、山陰労災病院と米子医療センターの間に位置しています。

Q 院長のご紹介をお願いします

A 院長の加藤卓です。46 歳で開業しましたが、米子の地に根ざしたのは 30 年前です。出生地が八頭町で妻が山形出身、米子に縁者がほとんどない中、5 人の子供（女 3 人、男 2 人）を育てる過程で米子人になりました。放射線医学が専門で、病院勤務医時代は主に画像診断とがん治療をやっていました。趣味は DIY です。

Q 貴院の特徴について

A 建物の外観は大山とそのすそ野を表しています。待合室には絵画の他に、海水と淡水とクラゲの 3 つの水槽を置いています。カルテは開院当初より電



子カルテです。放射線科出身ですので全身用 CT を設置し、超音波診断装置、上部消化管内視鏡、FCR など、画像診断に力を入れています。新型コロナウイルス発熱外来の対応に、趣味の DIY を生か



して、2 畳程度の倉庫を改造して感染症診察室を作りました。PCR スマートジーン、ドライケム抗原検査等を用いて診療しています。

Q 地域の方、患者さんへメッセージをお願いします

A 20 年間、この地でクリニックを続けられたことに、我が職員そして地域の皆さんに感謝しています。私自身、気力体力とも充実しており、まだまだ皆さんにお役に立てると自負しています。特養、有料老人ホーム、グループホーム等、常時 180 人位の訪問診療を昼休憩時間に行っています。苛酷にも思いますが、生き甲斐にもなっています。いずれ承継を考える時期が来ますが、少なくともそれまでは、皆さんよろしくお願いいたします。

